

第9回 小さな会社経営

1972年の初夏、私は築60年の古い一軒家を購入していました。場所はバンクーバーの東地区、大きな地図で見ますとバンクーバー周辺のほぼ中心地です。どこに行くにも便利だとの判断と、値段が手ごろだったからです。南向きの敷地の広さは、幅約12m奥行32mの384平方メートルでした。ですから116坪です。勿論、銀行から25年の融資を受けました。とにかく、持ち家を確保したのです。3階建てで寝室は4つ、リビングは2つ、トイレは2つ、キッチンも2つ、フルバスにシャワー室がありました。ですから、初めの頃、3人家族には広すぎる家でした。で、空いた部屋を日本から来ている若者の三食付きの下宿屋としたのです。いつも、一人か二人入っていました。それで、銀行への支払いが楽になりました。

ところで、長女が生まれた日、1974年の5月の事ですが、その日、私は自分の会社を始めました。つまり、独立したのです。カナダに来て6年目の事です。28歳の年でした。

その頃(1970年代)はカナダも景気が良く、賃金も物価も二桁のうなぎ上りでした。確か、アメリカはニクソン大統領が辞任した後、副大統領フォード氏が昇格して2年間勤め、その後、カーター大統領が登場してもものすごいインフレだった事を覚えています。購入した古い家も4年後には倍の価格になっていました。仕事と家庭、そして子供の事で毎日がとても忙し過ぎて、日本の事は忘れていました。しかし、妻は長女が生まれる前に一度、長男を連れて里帰りをしました。私はお金の余裕はなく留守番でした。その時、妻は初めて小倉に行きました。(山陽新幹線はまだ完成していませんでしたので、岡山まで新幹線で、そこから小倉までは特急でした。)

さて、自分の会社を始めたと言っても一から始めた訳ではなく、小さな鉄工所が売りに出ているのをそのままそっくり、ビジネスの権利を買ったのでした。で、ビジネスの内容はレジャー用の大きなトレーラーをけん引する連結器を販売し、車に取り付ける仕事でした。こちらでは、夏季には長期の休暇を取って家族と一緒に過ごす事を大切にしていました。大自然の中でレジャーを楽しめるトレーラーの旅は、子供達のいる家庭に大人気でした。トレーラーと言っても大小様々なタイプがありました。二人用のものから、大家族用まで大きさに合わせて連結器も大きさが変わります。2週間のビジネスの引き渡し期間を経て、3週間目からは前のオーナーが雇っていたヘルパーをそのまま雇い、その上に、もう一人雇い入れて計3人でやり始めました。車の下に入って小さなものなら既成のヒッチと言う鉄製のフレームをボルトで取りつけます。でも、大きな連結器になりますと、オーダーメイドでフレームを作って溶接します。勿論、この商売は春、夏がおお忙しで、冬の時期は開店休業の状態になります。ですから、夏の間は冬の間まで稼ぐ感じでした。いえ、こちらでのビジネスは、概して、冬の期間はビジネスが落ち込みます。それは、何かこちらの日照時間と正比例するような関係です。

ですから、一年目の夏の間は、休む暇もなく来る日も来る日も働く状態でした。朝の8時から夜の9時とか、11時頃まで働く事もありました。でも、気持ちは充実していました。自分のビジネスだと言う緊張感があり、夜、家で休んでいても頭の中はビジネスの事でいっぱいでした。でも、やはり若かったから大変と思いつつも出来たのだと思います。

秋の終わり頃仕事量が落ちて来た時、冬に出来る仕事を考え始めました。そして、オーダーメイドのボートトレーラーとか、ゴミを運ぶ一般的な箱型トレーラーを作り始めました。また、手すりとか、レストラ

ンのテーブルの足とか、窓枠とか、色々な仕事をしました。それに加えて、冬の時期は少し休む事もしました。そして、2年後、30歳になった時の秋、カナダに来てから丸8年目、一人で初めて日本へ里帰りしたのでした。一ヶ月間の長旅です。その時は、まだ、カナダドルは、価値がありました。確か280円位だったと思います。前年にカナダ市民権を取得していましたので、カナダ人のパスポートでの帰国でした。1976年、まだ、成田空港は開港していなく羽田空港でした。妻の実家は横浜でしたので横浜へ直行し、三日後、小倉へと向かいました。

小倉へ向かう途中、京都から山陰線で鳥取へ出て、大山の近くに住む友達を訪ねました。駅の売店で小さな時刻表を買いました。旅の予定は全て自分が立てて、趣味として、時刻表を眺めて旅の予定を立てる事が大好きでした。また、その頃、実妹夫婦が宇部の八幡さまの裏手に住んでいましたので訪ねて行き、母校へも行きました。宇部の街は、やはりとっても懐かしい限りでした。その時、中山先生とも会った事を覚えています。

でももう、40年も前の事で詳細は覚えていませんが、殆どの時間を母のいる小倉で過ごしました。その頃は、前年、1975年に新幹線が博多まで伸びていたの帰りは横浜までひかり1本で楽に行けました。でも、東北新幹線はまだ完成していませんでした。(1982年に完成しています。)

8年ぶりの日本は驚く事ばかりで、心は日本とカナダとで半々でした。日本もカナダもそれぞれに長所があり、短所がありますので、どっちが良いと言う訳には断言出来ませんでした。

東京で、ある晩、新宿でしたか、同窓生が数人集まってくれた事を覚えているのですが、残念な事に写真が一枚も残っていないのです。でも、同窓生との再会は、やはりとても嬉しい事でした。(もしかしたら、誰かが持っているかもと、淡い期待をしています。)

また、小倉では、兄弟姉妹がそれぞれの家庭を持っていて、6歳の甥っ子を頭に10人の叔父さんとなっていました。母は健在でした。小倉に住んでいる中学校の友達に会ったり、一人で小倉を散策したり、また、カナダで知り合った友達夫妻が帰国して、偶然にも東京勤務を終えた後、転勤となって若松区に住んでいました。小倉から直ぐですので、彼の家族を訪ねて行ったりしました。小倉の街はやはり懐かしく、何と表現したら良いのでしょうか、一人歩きをして楽しみました。小倉は、東に山があつて、北には響灘、私の育った町は日明(ひあがり)と呼ばれる町で、最初に、陽が差して明るくなるのでそう名前が付いたと聞いています。そして、近くには板櫃川(いたびつがわ)があり、大きいと思っていたのですが、意外にも私には小さく見えたのでした。東にある山を見ながら、啄木の歌『ふるさとの山に向かいて 言うことなし ふるさとの山はありがたきかな』を思い浮かべました。そして、その歌の気持ちがピッタリでした。でも、懐かしさは最高にあつたのですが、既に2度ほどロッキー山脈の大自然に接していましたが、何となくスケールが小さく感じました。そして、街全体がゴチャゴチャしていて、やはり日本だと感じました。道路も狭く、曲がりくねっていて、両側に歩道がなく、コンクリート製のドブ板が印象的で、ほのかに漂う匂いが鼻につきました。

新幹線、国鉄の列車、路面電車、バンクーバーでは経験出来ない、公共交通です。そして、駅前の広場の賑やかさ、繁華街での食事、飲食、全てが新鮮に見えました。でも、その反面、バンクーバーを懐かしんでいる自分もいました。30歳の秋でした。



実は、バンクーバーは通りに桜並木が見られるのです。この通りは自宅から歩いて5分もかからない所にあるのですが、幹の大きさは1メートルほどもあります。これは八重桜です。

・・・ 次回へ ・・・